

No.146
2004.
11.30

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内

岐阜県博物館協会

TEL 0575-28-3111

振替名古屋637909

新しい時代の創造に向けて

瑞浪市化石博物館長 奥村 好次



私が生まれ育った月吉の里は、「月の宮神社」があり江戸の昔から多くの文人により紀行文や産物誌などに、「月珠（つきのたま）」とか「月の御下がり」と呼ぶ

大変珍しい化石が紹介されるなど、歴史のある里です。こうした環境のなかで育った私は、巻貝の化石を、小さい化石から大きな化石まで「おさがり様」と呼んで、近くの山に行っては拾い集めて遊んでいました。

その後、小学5年の時に当時の明世小学校長の土屋千春先生の発案で「化石クラブ」が校内に作られ、4年～6年の希望者十数名で化石について学ぶこととなり、私達が集めてきた化石をスケッチしたり、化石の図鑑を見ては名前をつけたりしていました。非力な私達は、化石を掘るための道具も不十分な中で、山の斜面に取り付いては、化石の出ている所を見つたり、誰かが掘った大きな穴の開いた場所を見つけては化石掘りに挑戦したものです。たまたま殻が溶けてオパール化した化石を見つけて大喜びしたり、時のたつのも忘れて化石掘りに熱中していたことを思い出します。先生に教えていただいた中で特に記憶に残っていることは、「月の宮神社」の由来と、ピカリヤと呼ぶ大型の巻貝が「月の御下がり」と教えていただいたことです。その後幾多の経験をつんで現在の私があるわけですが、この頃の経験が、今の私の出発点であることに変わりはないと思います。

昭和46（1971）年に、瑞浪市内で中央自動車道の建設工事が始まり、縁あって化石調査に携わることとなり、その後化石博物館の開設に伴い、学芸員として30年が経過しました。

地域の自然の歴史に絞った専門博物館として、「瑞浪の2000万年の自然の歴史を明らかにすること」をテーマにした展示を展開し、化石掘りや地層見学のできる体験型の博物館として、化石が語ること・化石が教えてくれることを、入館者に地球が今までたどってきた自然の歴史や、人がはたしてきた役割を話し、これからどんな姿勢で自然と向き合っていくことが必要なかを、いくつかの事例を示しながら話をしてきました。また、化石の持つ魅力や化石を見つけたときの感動を実感できる施設として、ずっと活動してきたと自負しています。

昨今の混沌とした経済状況のなかで、これから博物館がどんな方向に向かうのか、予断を許さない面もあるかと思いますが、生涯学習施設として、博物館が果たしていかなければならない役割がきっとあるはずで、自然の歴史を正面から見つめ考えさせることで、ゆったりとした時の流れに身を預けて、深く物事を考える習慣を身に付けさせ、生涯を通して学ぶ姿勢を持ち続けさせるような活動を模索し続けることが大切だと考えます。

経済的な豊かさを追い求める時代から、生活や文化の面が豊かになる道を追い求める時代が、そろそろやってきてもよいのではないかと思います。これからは、ひとひとが心豊かに生きる道筋を示せるような活動を進めて行きたいものだと考えています。

第100回岐阜県博物館協会公開講座報告

期 日：平成16年7月11日(日)
会 場：大垣サイトピアセンター
講 師：森川 昭氏
主 題：「大垣と芭蕉」
参加者：190人

今回の公開講座は、大垣市文化財保護協会の芭蕉生誕360年を記念しておこなわれました講演会に参加する形で実施されました。

芭蕉は大垣を4回訪ねているのですが、そのうちの2回、①貞享元年(1684)芭蕉41歳のときの「野ざらし紀行」と②元禄2年(1689)芭蕉46歳のときの「奥の細道」にみる事ができる大垣での芭蕉と木因との交遊関係などについて句を通して話をされました。

① 野ざらし紀行では、

「大垣に泊まりける夜は、木因が家のあるじとす。武蔵野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立ちければ、しにもせぬ 旅寝の果てよ 秋の暮れ…」 「秋の暮れ」というのは、現在の九月の終わりであり、「霜月」に桑名へいっているの、十月には大垣にいたことがわかります。そしてそのあいだ木因や如行(大垣市竹島町の人とわかる)などと交遊を深めている様子をそれぞれの句を解釈するなかで示されました。

② 奥の細道では、「… 蛤の ふたみに別れ ゆく秋ぞ」と最後の文を読みふかめました。ここでもたくさんの弟子や知人が集まり、それを喜び長旅疲れをいたわられていること、見送ってくれる人々との別れがたい名残惜しさを感じ取らせて貰いました。

野ざらし紀行と奥の細道にみられる大垣での芭蕉は、人々と信頼関係で結ばれており、芭蕉自身がいかにくつろいでいたかがよく理解できました。身近な土地の名が出てきますし、本当に内容のあるお話でした。



(機関紙委員 海津町歴史民俗資料館 瀬古尹宏)

第101回岐阜県博物館協会公開講座報告

期 日：平成16年8月28日(土)
会 場：岐阜市歴史博物館 講座室
講 師：岐阜市歴史博物館館長 白水 正氏
演 題：「雪舟と美濃」
参加者：52名



近年、東京・京都の両国立博物館で展覧会が開催され、大きな注目を浴びた室町時代の画僧「雪舟」を取り上げ、美濃との関わりや「山寺図」のモデルとなった場所についての考察を伺いました。

(講演要旨)

雪舟の「山寺図」は、狩野常信の模本によってその存在が知られている。それは、美濃の伊自良(現・山県市)にあった楊岐庵を描いたものである、と以前から指摘されていたが、楊岐庵の所在が現在では不明であることもあり、描いた場所についての議論は長く保留されていた。

雪舟は文明13年(1481)に美濃を訪れ、革手の正法寺に滞在して数々の作品を描いたが、その実体がわかっているのは斎藤妙純の弟・春岳寿宗の求めに応じて楊岐庵周辺を描いた「山寺図」のみである。応仁の乱をさけて、京より美濃へは多くの文化人たちが来ており、守護であった土岐氏のみならず斎藤氏も、京の進んだ文化を手厚く保護していた。雪舟の来訪は美濃に水墨画を広めるひとつのきっかけとなり、後に土岐氏の中に「鷹図」をはじめとする水墨画を描く武人画家を輩出することへとつながったのではないだろうか。

また、「山寺図」のモデルとなった場所については、旧・伊自良村へ長年幾度も足を運んだ経験と地元の人たちの意見から、釜ヶ谷山から美望山にかけての風景であると思われる。

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 稲川由利子)

第59回岐阜県博物館協会会員研修会報告

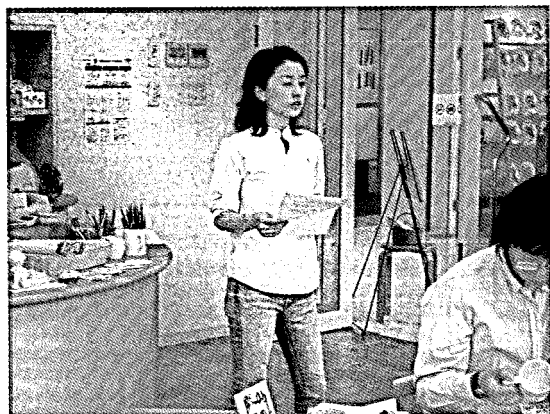
期 日：平成16年9月9日(木)～10日(金)
会 場：岐阜県現代陶芸美術館等
講 師：渡部誠一氏／岩井利美氏／山内美和氏
演 題：「美濃焼文化と教育普及活動の展開」
参加者：23名

美濃焼文化と教育普及活動の展開というテーマで2日間にわたり会員研修会が行われました。1日目は岐阜県現代陶芸美術館の渡部誠一氏と岩井利美氏に美術館の施設を実際どのように使って活動しているかお話しして頂きました。展示室での作品鑑賞会やプロジェクトルームでの研究発表や授業、そして茶室での茶道体験などいかに興味をもって来館してもらおうかという内容でした。



2日目はこども陶器博物館の山内美和氏に子供を引きつける取り組みということでお話しして頂きました。来館者の大半が親子であるため展示やイベントの内容を子供だけでなく親にも楽しめるよう工夫しているとのことでした。

その後館長のご好意で、施設の一つである絵付け工房で参加者全員が実際に思い思いの絵付けを行いました。



(機関紙委員

土岐市埋蔵文化財センター 中尾 茂)

第102回岐阜県博物館協会公開講座報告

期 日：平成16年9月26日
会 場：光記念館
講 師：河西珠実氏
演 題：「画狂 須田剋太
『創造の生命力』その画業と生涯」
参加者：35名

光記念館は、平成11年に自然史、歴史、美術の三構成なる総合博物館として飛騨高山の丘陵地に開館しました。光記念館では特別展として、9月18日～11月14日(日)まで「画狂 須田剋太」展～創造の生命力みなぎる芸術世界～が開催されております。

此の度は、「画狂 須田剋太『創造の生命力』その画業と生涯」と題しまして、河西珠実学芸員に展示室で作品を鑑賞しながら特別解説をして頂きました。



グワッシュ画を得意とした須田剋太は、対象に迫る厳しさと才気溢れる大胆かつ鋭い筆使いで、独創的な絵画世界を形成し、平成2年に84歳で亡くなるまで洋画壇の最高峰として抽象・具象両面に、緊張溢れる格調高い境地を開きました。

また、須田剋太は数々の名作を残した作家・司馬遼太郎氏の不滅のベストセラー『街道をゆく』の挿絵画家であることは夙に有名です。

特別展では、油彩画、グワッシュ、書、陶芸など須田芸術の作品約70点を一堂に集め、天衣無縫の画家「須田剋太」の魅力を追求しており、「遊女」「酔芙蓉」など代表的な作品を中心に約70点をご紹介します。

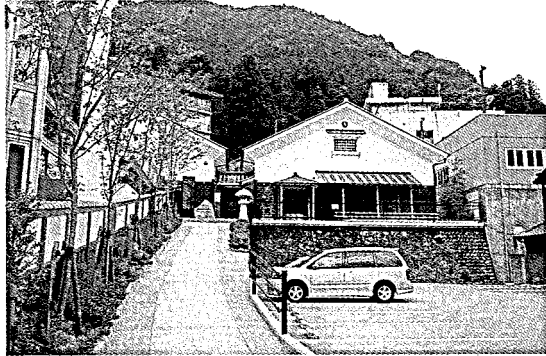
また、須田剋太が子供のような心の持ち主で誰からも愛されている人柄や靴を履いたまま寝たりなどのエピソード等興味深い内容も参加者の心をひきつけました。

(機関紙委員 光記念館 吉井隆雄)

下呂発温泉博物館

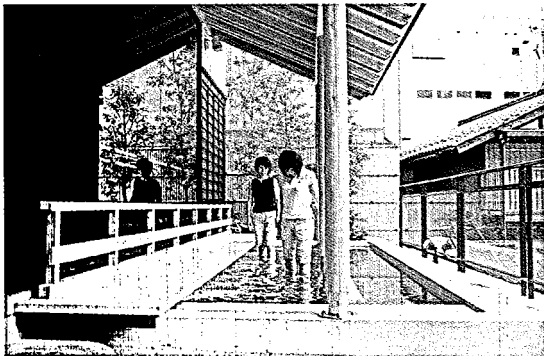
〒509-2207 下呂市湯之島543-2
TEL: 0576-25-3400

この春、下呂温泉に誕生した、温泉の博物館を、機関紙委員との問答の形で、わかりやすくご紹介します。



委員 少し変わった館名ですね。

徳原 温泉の情報をたくさん提供して、温泉をもっと楽しんでいただこう。そのために、“全国の温泉を科学と文化の両面から紹介する温泉の専門博物館”をつくろうという建設目的がありました。下呂温泉博物館だと、下呂温泉の博物館、或いは下呂の温泉博物館だと思われそうです。だからこういう名前になりました。



足湯と歩行浴コーナー

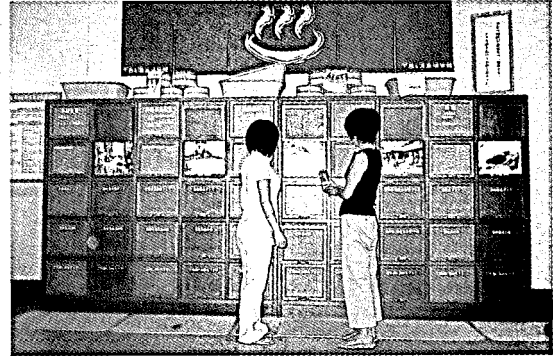
委員 温泉を科学と文化の両面から紹介すると言っても、なかなか難しいですね。

徳原 来館されるお客様の殆どは、レジャー目的ですから、楽しくて、しかも、しっかりした内容の博物館にしたい、という思いがありました。幸い、岐阜県博物館の古田先生にご指導をいただくことができ、皆様に満足いただけるものができました。

委員 それでは、博物館の内容を説明してく

ださい。

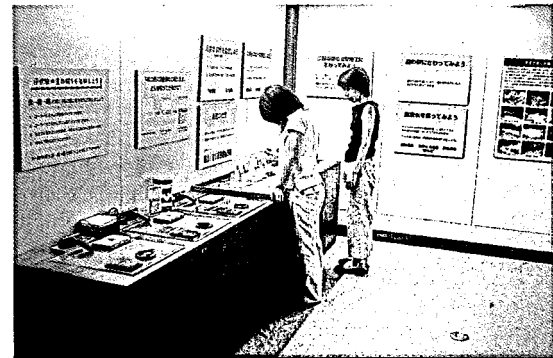
徳原 博物館を、温泉の科学、温泉の文化、ようこそ下呂温泉へ、温泉博士の部屋、おもしろ温泉チャレンジの5つのコーナーに分け、展示がしてあります。また、温泉を実感していただけるよう、足湯も楽しめる歩行浴コーナーを設けています。



大人気の脱衣箱風温泉百科事典

温泉の科学のコーナーでは、温泉が湧き出す仕組みや温泉とはどういうものか、といったことについて紹介しています。

温泉の文化のコーナーでは、全国の共同浴場、露天風呂、湯治場の写真のほか、江戸と明治の温泉番付や、いろいろな温泉地が発行してきたパンフレットなどを展示しています。



おもしろ温泉チャレンジコーナー

また、おもしろ温泉チャレンジコーナーでは、温泉のpHや塩分の測定、浮世絵版画づくりなどが体験できます。

委員 どうも有難うございました。

【交通】 JR下呂駅から徒歩13分

【開館時間】 9:00~17:00

【休館日】 毎週木曜日

木曜日が祝祭日の場合は翌日

【入館料】 大人400円 小学生200円

(下呂発温泉博物館 館員 徳原吉隆)